



フラゴナール香水工場
Parfumerie Fragonard



グラース
人口約5万。12世紀には町として形づくられた。バラ祭りのはが、8月にはジャスミン祭りが開かれる。仏シャンソン歌手エディット・ピアフが1963年に永眠した地としても知られる。



パルファム・コスメティック・ワールド
Parfum Cosmetic World



国際香水博物館植物園
Les Jardins du MIP

On the scene [現場を旅する 84]
世界の街角から記者が伝えます。

Grasse

フランス

グラース、花が咲き誇る香水の都

両 手を開いた途端、香料を振りかけたかと思うほどの香りが漂った。ジャン・ナポリさん(69)の手の中にあったのは、ジャスミンだ。自宅で摘んでから時間が経っているというのに衰えていない。「花の大きさも香りの強さもこの土地ならではの」と自慢げだ。地中海に面した南仏カンスから内陸に約20キロ、「香水の都」と呼ばれるグラースを訪ねた。古い建物や狭い路地が続く旧市街に、1926年創業の老舗香水メーカー、フラゴナールがある。工場や店舗には多くの観光客が入り込んでいる。ナポリさんに会ったのは、その近くにある広場だった。グラースで生まれ育った彼は、子どものころ夏休みになると、イタリア移民の祖父や両親を手伝い、ジャスミンの花を摘んだという。花は夜に咲くため、作業は未明から始まった。「主にイタリアやスペイン、ポルトガルからの移民の仕事だったよ」。大量の花びらは地元香料会社や、仏高級ブランドのシャネルが近くに構える香水工場に届けられた。

グラースで香水づくりが発達したのは18世紀ごろから。地中海の温暖な気候の下、香りの強いジャスミンやバラなどがよく育つ。革なめし産業が盛んだったが、革手袋に花の香りをつけて売り出したところ、大人気になった。「手に革のにおいが残る」と、愛用する貴族女性らから不満が伝わったのがきっかけだった。次第に香水の工場や店舗が増え、名高い調香師やシャネルの5

番などを生んだ。その手袋を考案した職人の家系は今、香水の老舗ガリマルとして工場を構えている。45ユーロ払えば誰でも調香体験ができると聞き、向かった。127本の香料瓶を前に座り、基本となる「ベースノート」、しばらくして香る「ミドルノート」、一番最初に香る「トップノート」の順に3~5種類ずつ選び、混ぜ合わせる。

「考え過ぎず、直感で」と調香師のキルステイ・カネルヴォさんが教えてくれる。甘い香りに柑橘系、スパイスがきいた風味……さまざま嗅ぐうち、鼻がマヒしてきた。優れた調香師を仏語で「ネ(鼻)」と呼ぶそうだが、それを実感する。

「鼻がきかなくなったらこれでリセットして」とカネルヴォさんに差し出されたコーヒー豆を時折嗅ぐ。全体に控えめな香りを選んでしまったかと思ったが、割と甘ったるい香水が出来上がった。

工場には年間約2万人が訪れる。ガイドのステファニー・モアンスさんは「5歳の息子もオードトワレをつけてます。瓶はスパイダーマンの絵柄ですけれどね」と笑う。フランスだけでなく、ドイツや米国、中東からの観光客も増えているという。

揺るがぬブランド力

「化粧品やろうそくだけでなく、洗剤に掃除用品と何にでも香りをつけるようになり、世界中で需要が高まっている。地元だけでなく、アジアなどからも香料を買って調合した製品を、世界中に売

っています」。グラース近郊の香料会社、パルファム・コスメティック・ワールドを訪ねると、最高財務責任者(CFO)オリビエ・リオンさんはそう話した。グラースの豊富な花を使って生まれた地場産業だが、天然香料は収穫量が左右され、手間も人手もかかって割高だ。次第に化学的に作る合成香料が増えた。

それでも、人件費の安い海外に拠点を移さず、仏香料会社の9割近くがここに立地しているという。合成といっても、多くは自然の花の香りの複雑な成分を分析して開発される。毎年5月にグラースで開かれるバラ祭りには世界の調香師が集まる。著名な調香師学校も集積し、技術が伝承されてきた。

「地名によるブランド効果も大きい」とリオンさん。中国など海外企業が送ってきた瓶に香水を詰め、送り出すビジネスも多い。市民の約4割が香り関連の仕事についているという。

国際香水博物館が運営する植物園に立ち寄った。バラやジャスミン、ラベンダー、オレンジなどが約2万平方メートルの広さに植えられ、南仏の青空の下に緑が広がっていた。

地元の女性がイチジクの実をもぎ取った。「え、いいんですか?」。驚く私に、「この植物園では、何でも取ったり食べたりしていいです」と、甘そうな果肉をにこにこほお張った。バラが咲き乱れる春には、花を自由に摘んで帰れるそうだ。

そこかしこにある花や木々と、人々との距離が近い。そんな暮らしの積み重ねが、「香りの都」を形づくっているのだろう。●

(GLOBE記者 藤えりか)



左/旧市街。右手前のアイスクリーム屋さんではバラ味が人気。右/市庁舎(左)と、ノートルダム・デュ・ピュイ大聖堂



とう・えりか
1970年生まれ。ロサンゼルス支局長などを経てGLOBE記者。グラースで作った香水は日本の気候だと強く感じられた。

